

## 音読教材 新美南吉「赤い蝋燭」

山やまから里さとの方ほうへ遊あそびにいった猿さるが一本いっぽんの赤あかい蝋燭ろうそくを拾ひろいました。赤あかい蝋燭ろうそくは  
涙山なみだあるものではありません。それで猿さるは赤あかい蝋燭ろうそくを花火はなびだと思おもい込んでしま  
いました。

猿さるは拾ひろった赤あかい蝋燭ろうそくを大だい事に山やまへ持もって帰かえりました。

山やまでは大たいへんな騒さわぎになりました。何なにしろ花火はなびなどというものは、鹿かにしても猪ぶた  
にしても兎うさぎにしても、亀かめにしても、魼いかりにしても、狸たぬきにしても、狐きつねにしても、  
まだ一度いちども見みたことがありません。その花火はなびを猿さるが拾ひろって来きたというのであり  
ます。

「ほう、すばらしい」

「これは、すてきなものだ」

鹿しかや猪ししや兎うさぎや亀かめや魼いたちや狸たぬきや狐きつねが押おしあ  
い合あいして赤あかい蝋燭ろうそくを覗のぞきま  
した。すると猿さるが、

「危あぶない危あぶない。そんなに近ちかよってはいけない。爆ばく発はつするから」といいました。

みんなは驚おどろいて後しりごみ返かえりました。

そこで猿さるは花火はなびというものが、どんなに大おおきな音おとをして飛と出ですか、そしてど  
んなに美うつくしく空そらにひろがるか、みんなに話はなして聞きかせました。そんなに美うつくし

いものなら見たいものだと思ひました。

「それなら、今晚山の頂上に行ってあそこで打上げて見よう」と猿がいいました。みんなは大へん喜びました。夜の空に星をふりまくようにばあつとひろがる花火を眼に浮べてみんなはうっとりしました。

さて夜になりました。みんなは胸をおどらせて山の頂上にやって行きました。猿はもう赤い蝋燭を木の枝にくくりつけてみんなの来るのを待っていました。

いよいよこれから花火を打上げることになりました。しかし困ったことが出来ました。と申しますのは、誰も花火に火をつけようとしなかったからです。みんな花火を見ることは好きでしたが火をつけに行くことは、好きでなかったのです。

これでは花火はあがりません。そこでくじをひいて、火をつけに行くものを決めることになりました。第一にあたったものは亀でありました。

亀は元気を出して花火の方へやって行きました。だがうまく火をつけることが出来たでしょうか。いえ、いえ。亀は花火のそばまで来ると首が自然に引込んでしまつて出て来なかつたのでありました。

そこでくじがまたひかれて、こんどは鼬が行くことになりました。鼬は亀よりは幾分ましでした。というのは首を引込めてしまわなかつたからであります。しかし鼬はひどい近眼でありました。だから蝋燭のまわりをきよろきよろとう

ろついているばかりでありました。

遂々猪が飛出しました。猪は全く勇しい獣でした。猪はほんとうにやっ  
いて火をつけてしまいました。

みんなはびっくりして草むらに飛込み耳を固くふさぎました。耳ばかりでな  
く眼もふさいでしまいました。

しかし蝟燭はほんともいわずに静かに燃えているばかりでした。